

懇談会：「国土計画考」 - その 6 -

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成18年2月9日（金）

場所：ホテルプレジデント青山「ファンクションルーム」

A氏 前回、四全総まで終わったということで、先生のお話を聞いてそのペースが良くわかりました。そこから今度は第五次全国総合開発計画になりますね。この辺はたぶん今野先生は、客観的にもう少し大所高所からご覧になっていらしたと思います。四全総が終わって五全総を策定する前までについて、まずお話しいただきたいと思います。

一つは、そもそも全総は要るのかという議論もあったと思います。その中で第五次全国総合開発計画を策定する、その経緯。もう一つは四全総のフォローアップ。順番が前後してすみませんが、まず、四全総のフォローアップでそもそもどんな評価になったのか。次に、どういう経緯で五全総をやろうとしたのか。この辺は実は我々からするとブラックボックスの部分です。

今野 三全総が破綻して四全総へというふうになってきた背景は、一にも二にも「東京一極集中」ということです。東京一極集中が国勢調査を中心としてわかってきて、戦後体制の大都市圏対地方圏という、全総計画を考えていく根底のベースが崩れたわけです。関西圏は全然プラスにならないでマイナスのままなものですから。率直なことを言うと、国民全体がそれでちょっと頭へきたという状況があったと思います。したがって最初の段階では、「やれ」と、何とか次の政策を仕立てるという要請はあまり弱くはなかったと思います。強かったと思うのです。

ただ、その原因がなかなかよくわからない。東京だけがというのがよくわからないで、かつてもそうなんですけれども、本当に原因がわかってくるときまでに時間がかかるんですよね。統計がすべそろって横につながるまでにはどうしても5年から10年はかかる。5年から10年かかると現実問題は次の問題に移

ってしまう。これが、全総50年の歴史の中で常に苦しんでのたうち回っていた一つの傾向だと思います。それに見舞われたと思います。

それで国会、政府に対しては、一時、東京一極集中に対して答えにならないといって中曽根総理のときに突っ返されまして、これでは全総として意味がないではないかと言われたわけです。いま考えてみると、それが全総の不要論の最初だったかもしれません。そういうことがあったのですが、それに対する政府の対応は、実態がよくわからないために対応のしようがないということもこれあり、「多極分散型国土形成法」という法律をつかって国会に通したわけです。東京一極集中をそれによって排除いたしますということで、法律は基本法になりますという形で通したのですけれども、結果として、その後、全然プロジェクトがついてこなかったということがあります。

そのために、「多極分散型国土形成法というのは一体何だったのか」というのがだんだんバレてきてしまうわけです。それが、四全総を一つのある局面から見たときの破綻の道だったと思います。

それにのった国民運動としては「遷都論」だったと思います。遷都論にとってはフォローの風で、したがって遷都論が非常に盛んになったと思います。

それから、だんだんわかってきたことは、経済の基本構造が変わってきたということです。それは、グローバル化とか脱工業化とか言われる、今日になってみればかなりはっきりと見えているこの新しい路線が原因だということがわかってきたと思います。

ただし、それに対する対策というのは、国土政策的な観点からすると、いまだに何も無いのではないのでしょうか。東京に集まっている国際金融、国際情報の機能を分散させるということは誰も言っていませんし、それが可能か不可能かというのは、分散によって対応できるなんていまは誰も思っていないのではないかと思います。それ以上に平成の不況失われた10年で日本経済が落ち込むと地方の果てまで影響を受けることを体感したため東京罪悪人的発想はなくなったのではないのでしょうか。東京に吸いとられるのではなく外国が相手だというのは中国の発展で知らされたと思います。

A氏 国際金融は少なくとも大阪に立地しろといっても、それは立地しませんからね。

今野 ええ。その関係を国土政策の中で明確にしたのが総点検による解析資料だったと思います。

人口と所得と工業生産だけだったいままでの見方から、金融取引や情報に関してもそういう面からも見たということです。首都圏、中部圏、近畿圏、それから地方圏、さらにもう少し手の込んだものとしては、札幌・仙台・広島のある4都道府県という、5地域くらいに国土を分けて見てみると、それによって初めて東京一極集中の実情がわかったというのが業績だったのではないかと思います。これは国土情報を解析して政策をつくっていくという意味では、いわゆる事務屋ベースでいくと計画策定手法上はヒットだった業績だと思います。

A氏 東京にどういうふうに集中しているのか、なぜ集中しているのかというのを、一応分析した……。

今野 これによって随分収れんした議論ができたと思います。

A氏 情報化がどういう役割を果たすかという議論は、そのときは？

今野 議論はしましたけれども、結果として、この解析の中では一番わからないところですね。だから情報の場合には、マスコミの従業員とかそういう表面的な話だけになっているんです。それでも東京がかなり集中度が高いということがわかったのです。しかし情報の空間への影響は直接的、物理的でないだけに定量的に把握出来ず、機能的な情報についてはいまだにわかっていないと思います。

A氏 2つの議論があったと思います。一つは、情報化の進展で東京と中山

間村は情報格差がなくなる、地方分散に働くという議論と、もう一つは、情報化というのでより東京が強くなって、東京に集中すると。

今野 あまり細かな解析をしないで、こちらもそんなに勉強しないで言うのは暴論かもしれませんが、前者の議論は既に三全総の当初からあったのです。全国土即時通話化というのが新全総と三全総の間にでき上がるのです。小笠原島まで即時通話になる。その電話の効能という議論の中でそれがあったわけです。したがって三全総のときの議論では情報については、国土に地域格差をもたらす要因にはならないのではないかと考えました。

三全総策定の時情報の発達が交通の代替となるという説が流布されましたが、ある企業が出張旅費を節減しようと地方支店との間の専用電話を敷いたらかえって出張が多くなったという結果があると聞かされました。情報は却って交通需要を増大させるわけで交通と情報は代替性より相乗効果となり経済発展に寄与するのだと考えさせられました。その結果国土空間については格差是正につながる一面が強いと思いますが、電気通信情報やメールと Face to Face の情報とは異なるのではないかと考えてます。

A氏 むしろ平準化すると。

今野 はい、そういうことになったのです。プロジェクトが始まって数年の間にあっという間に全国に波及しますから、時間軸上に置いた議論からすると、前者は古くからあったやつで、私がここで、どうもメスが十分に入っていないというのは後者の議論なのです。新しい情報機能が社会的にどういう機能を持っているのか、というものです。それがまだ部分的にしかわかっていない。

A氏 情報化については、機能論と産業論とあると思います。情報化という機能がどういうふうに国土の構造に影響を与えるか。もう一つは、特にハードではなくてソフトのほうですが、情報サービス産業がどういうふうに影響を及

ぼすかという2つがあると思います。

**今野** 2つあることは事実で、後者の場合は、日本が鉄鋼・造船という重化学工業のかたいガチガチから、自動車、メカトロニクスとなってきた、さらにそれを細かに見てみると、情報機器製作というのが、ビデオから始まって携帯、コンピュータと、非常に大きなウエートを占めてくるから馬鹿にできない、という話にはなってきたわけです。

でも、その効果というのは、あっという間に普及することもある、時間的にわりに短期間なのです。あとはもうリタイア生産の量しか出てこないという形になっていまして、かつて鉄鋼とか自動車で議論したこととちょっと違ったと思いますね、議論の質が。

ただし、社会的機能についてはものすごく大きいと思って、みんな構えていたけれども、中身はよくわからないですね。単純にわかってくるのは、東証の取引あるいは外為の取引で、世界じゅう即というふうになっていないと成り立たない。しかも、それが信頼度が問われているから東京が第三の極になれた、とかいうことはわかるけれども。

**C氏** 90年代に入ってから変化のスピードがものすごく速くなりますね。一番大きく左右したのはやはり通信コストの低減だと思います。これは地方も世界もそうで、しかもコンピュータの普及によってむしろコストが無料に近いような形になった。その効果というのはものすごくあると思いますね。

情報化と都市集中の問題が議論されたのは、「人と国土」でいろいろな推計というか……、四全総の再評価のときでしたか、それをやった段階でその議論は随分出ていた。それともう一つ、その頃からいろいろ議論が出ていたのは人口減少です。人口推計というのは3つぐらい出ていて、そこがものすごく大きいのと、それ以降、コンピュータの生産が90年に入ってから極端に大きくなった。ノートパソコンが普及し、携帯が出てきた。携帯なんかはむしろ中国のほうが普及している。日本は通信線によるインフラが整備されていたからそこ

は遅れたけれども、それによって社会構造がものすごく変わったと思います。ソフトや何かでも、企業の立地数というか、事務所数のあれを見てもものすごく変わってきている。

**今野** 実はこの間も人口減少のある勉強会のあるときに、ある種の開き直りをやったんだけど、「将来、人口が減少しますよ」というのを全国計画ベースで最初に公言したのは三全総なんです。だから昭和52年です。

**C氏** 52年か53年ですね。

**今野** そうです。そのときに、それをベースに連動した政府の報告としては、経済企画庁がまとめた「2000年の日本（全10冊）」があるんです。三全総はこうした流れを受けとめている全国計画です。しかも計画としては非常にみっともなく、私たちが中央政府として想定した人口の動向と、原案を都道府県47人の知事に回してチェックしてもらってそれを集計したやつで、フレームがこんなに違ったわけです。それをついに調整できずに二つ並べて閣議決定しました。

**C氏** 地方自治体は希望値を入れたということですか。

**A氏** 高いわけですね。

**今野** もちろんそうです。選挙で選ばれる人が、「わが県は人口が減ります」と言って当選するわけはありませんからね。それで收拾つかなくて、フレームとして2つ出したのです。三全総というのはそういうみっともない閣議決定なんです。

だけど、そのときまでいかに人口減少というのを言葉として言ってきて、なるほどわかってきたとはいうものの、全く身近に感じないで今日まで来たんで

すね。それをついに絶対数減になってしまった。そうなった途端に、マスコミから評論家から政府からみんな騒ぎ出すわけです。

人口というのは、三全総という長期計画では百年単位でしかもの見方が成り立たないものなのに、何と30年間、誰一人騒がずに寝かせておいて、途端にブームみたいになって、正月の新しい記事がないのを埋めるために（笑）、各新聞がみんな「人口減少時代の到来」ということをやり出す。もともと対応の姿勢がなってないんですよ。長期的問題を短期的見方の中でこなそうとしている。

**B氏** 人口減少を言うとしても人口政策を言わなければなくて、人口政策については、戦争中あるいは戦後のいろいろな苦いことがあるので、むしろそれに触らないほうがいいというタブーが働いていたという話を聞いたことがあります。

**今野** タブーがあるのは事実です。権力を委ねられた政府の意志で人口が決まるということはということは独裁体制下でもあり得ませんから実質人口政策とか適正人口とかはあり得ない空概念上の言葉だけといってよいのではないですか。

**B氏** そういう時期もあったんですか。

**今野** 第二次大戦の大国意識の一つとして一億日本がありましたかね。したがって、あるのは事実ですけども、それだけで決まっていたわけではないのです。というのは、日本の人口を2000年間、三全総を策定するときに調査をしたんです。こんなめっちゃくちゃな調査ができるかと思ったのは、かなり歯ごたえのある報告書が出てきまして、日本の人口は400年～500年をワンサイクルにして成長期と成熟期があって、人口が急増するときと停滞する時期が交互にきていることが解りました。

B氏 「人口波動説」ですね。

今野 そうです。急増するときと停滞するときを繰り返しているんです。しかも、これは社会的に公表していませんけれども、その後のアフターケアの調査結果、さらにその翌年やったのでは、ヨーロッパも同じ動きなのです。ただし、中国とアメリカはそれにのってないんです。アメリカは歴史が400年しかないから検証のしようがない。中国はもともと人口統計がない世界。

だけど、中国とアメリカなしに世界的な傾向だとは言えないままになっているけれども、少なくとも日本列島という、2000年間、いわゆる孤島型で来た社会は、外からの影響がない純粋な条件であるわけです。そこで、なぜそういうサイクルを描くのかというのは、三全総のあと四全総にいくときまでの間に内部ではものすごく議論したのですが、率直に言ってわからないのです。わからないで、「神の見えざる手」だ、神の摂理ではないかという話がありました。

A氏 あるとき吉田さんがおっしゃっていたんですけれども、人口の推計というのはまだまだ技術が未発達だと。総数も未発達だし、特に地域間の人口の配分といいますか、増減になると全く未発達で、例えばコーホート法みたいな単純な形しかない。人口というのはいろいろな社会・経済現象の一つの帰結だから、なかなか人間の英知が及ばなくなって非常に難しい、ということをおっしゃっていた記憶があります。その辺どうですか。

今野 全くそのとおりだと思います。実は明治以降、工業化社会になってから、地域間移動率というのは人口の数値を見るときにものすごく大きなウエートになってしまったけれども、それまでは地域間移動率というのは微々たるものだったんですね、人口の動向の中では。江戸時代は政策的に封じられていたこともあって微々たるものだったから、少なくともナショナルエコノミーとしての人口論と国土としての人口論、これだけでいけば、さっき言ったメカニズムが強烈に働いている。その背景には、合計特殊出生率らしきものを逆算して

いきますと、成熟期つまり江戸時代にはやはり出生率は落ちています。คอนโดームの話とか結婚の話とかそんな話じゃないんですよ。

それから見ると、いま打っている小泉内閣の人口政策論なんていうのは全く総合的な政策になっていない話です。児童手当をつけるとか、晩婚化等単発型で対応するのではなく全体として組立てるべきですよ。

C氏 それはそうなんだけれども、ヨーロッパのケースでも何でも、経済が大きくなれば人口が増えるわけではなくて、国の別の容量みたいなものがある。人口はどこかで頭を打つんじゃないですかね。昔はそれは食糧だったけれども、食糧はいまやオープンになっている。ただ日本でも52～53年頃の推計は、都市集中で、都市の人口が相変わらずずっと伸びるような推計を出していましたね。人口も減ると言いながら、あまり減るような志向はしていなかったですね。

今野 話が断片的になって申し訳ないんだけど、明治以降の近代日本になってからの政府というのは、最近つくづく感じているのは、マルサスの「人口論」に振り回されていた百年なんです。明治の最初に維新が起きて、3,500万人から頭をもたげてくるのは20年くらいあとになってからです。体制の改革より人口統計のほうがあとなんです。

A氏 人口増大への脅威ですね。

今野 そうです。人口増大への脅威というのは、それが一番激しい形で出たのは戦後なのです。戦後体制の改革のとき、全総を中心にした国土政策なんていうのが表に出てきて、最後は国土庁長官なんていう専門の国务大臣を置く省庁までつくったというのは、全部、人口急増への恐怖感からの脱却論の一つです。戦前はそれを吸い上げて侵略戦争になっていったり、それから、南米への移民政策になっていったりしたわけですよ。殖産興業というのもそれから出て

きているんです。

だから戦前の政策論というのは、明治維新から始まって80年間、増える人口をどう抑えるかというのに終始していたのです。それが終戦になって食糧がない中で再びそこに火がついたでしょう。その証拠は北海道開発法の第1条に出ていると思います。あれは、人口急増にどう対応するかというために北海道開発法が制定されたわけです。

A氏 そこに吸収しようということですか。

今野 もちろん。したがって北海道開発というのは、東北開発以下の地方開発と出発点が全く違います、その理由から言って。それは、東北開発促進法の第1条と北海道開発法の第1条を見比べてみれば一発でわかります。それが法制局へ持って行って名前も北海道は開発法になったし、東北以下、地方は全部開発促進法になったわけです。この違いだというふうに私は解釈して、『東北開発研究』に論文を書いたことがありますけれども、東北の人はどこまでわかったかわからない。まあ、東京の者だけなんですね、そういう議論をやるのは。仙台や盛岡でそんな議論をしていたはずはないんです（笑）。だから、出した雑誌が悪かったなと思ってね。

C氏 明治の初期というか江戸時代の末期から、北海道の開拓に各藩がみんな参加しましたね。あれは各藩の人口問題が背景にあったのですか。

今野 いや、人口急増論というのは明治の本当の初めのときはまだあまり身にしみた形ではないんです。人口急増するとは思っていない。3,500万社会なんです。それで北海道が手に入ったでしょう。北海道の開拓の理由の最大は「国防」ですよ。それに対する戦力としてあげたのが、「戊辰の役」で敵に回ったところに対する罰則で、その罰則の原則は、各藩の敵に回ったのを禄高を削ったでしょう。禄高を削った分を「北海道に土地をやるから行け」というや

り方だから、北海道開拓の第1段階というのは、全部戊辰の役の賊方、会津や仙台が行ったわけです。全国各地からの移民が本格化するのには北海道開発が動き出してからです。

C氏 下北もそうですね。

今野 そうです。下北のルーツはそれです。下北は対ロシア防衛を主任務として会津藩が担当し、今のむつ小川原地区は会津からの移住の歴史です。

A氏 ああ、そうなんですか。

今野 そうです。

C氏 斗南藩。

今野 これは面白い見方なんですけれども、戊辰の役で一番悪かったのは会津ですよ。本当は伊達が一番悪かったのかもしれない、東北列藩を指導したから。でも、伊達は本格的戦闘をあまりやらないで降参しちゃったでしょう。ところが、会津は伊達の南にあったものだから本格的戦闘をやらざるを得なかった。それで会津が睨まれちゃったわけです。

私の郷里は伊達の支藩で亙理藩というのがあって、伊達成実という豊臣、徳川時代に有名な武将がいて、これが政宗の片腕だったんですよ。これが3万3000石で私の町にいたんですけれども、この武士が全部北海道開拓に出たのです。明治2年。これが北海道開拓の第1号です。後ほど、北海道開拓の第1号というつらい立場を克服したというので殿様が爵位をもらいました。

A氏 それは移動させられたのですか。

今野 いえ、命令ではなくて、朝廷に違反した罪を滅ぼしたいと、自主的な判断で行ったんです。そのときにこういう噂が私の田舎に残っています。伊達は表に立ってあまり戦わなかったから、罪一等を減じられて北海道のいいところをもらった。ところが、会津は徹底的にやったものだから、罪一等を許されずに、北海道より条件が悪い、食うに食えないところにやられた。これが下北の斗南藩 - - こういう噂が私の田舎にあるくらいなんです。実は斗南の方が先ですけど。

それ以降、明治維新政府は北海道開拓を本気になって賊方をまず最初にやりましたね。明治の30年くらいから方針が変わって、薩長か佐幕かという話ではなくて、災害が起きたり何かして困ったところに送るようになった。その典型例が十津川の連中の開拓です。旭川と留萌の間に新十津川ってあるでしょう。あれは、十津川の大洪水で農地も集落も全部失った奈良県南部が一挙に行ったところなのです。だから、会津藩が懲罰として下北にやられた。伊達藩が行ったところで一番有名なのは亙理藩が行った伊達市と札幌の白石……。

C氏 伊達町ね。

今野 私財まで投げうった殿様の名前にしなければというので町を伊達町としたのです。それで第3段階は、そういう災害や何かで送る。屯田兵の歴史というのはその3段階があります。

C氏 苫小牧は八王子ですよ。開拓のときに行ったんですね。

今野 そうです。千人町から江戸防衛、甲州街道警固役の千人同心が苫小牧に移住しました。あの八王子の武士階層というのは江戸藩の中では一番偉くない連中なんですよ。

C氏 ああ、それで近藤勇が出てきたのか。

今野 そうです。高尾の峠を越えてきた西から来る敵を、あそこでやっつけるための武士だったんですね。逆に言うと、偉くないけれども、八王子というのは幕府の江戸城直轄地なのです。幕府の汚名をなくすために苦小牧の町を開いたともいえます。だからいま、苦小牧と八王子は姉妹都市で非常に交流が盛んですよ。

C氏 釧路は鳥取なんだよ。

今野 そうですね。それはみんな、さっき言った伊達藩が第1号で行った、あの流れなんです。

A氏 いま原発とかで下北半島のほうがちょっと賑やかですけど、明治時代の下北というのは相当ひどかったんじゃないですかね。

今野 いや、明治時代どころじゃない、戦後、あそこはまだコメがとれなかったのです。

C氏 あそこはコメのとれない地域ですよ。

A氏 相当ひどかったみたいですね。

今野 北海道の上川がコメの大産地になったとき、まだあそこはコメがとれなかった。戦後ですよ。耐寒品種の開発が行われて初めて、あそこはコメがとれるようになった。それでもヤマセの影響で年により米作としては不安定でした。山を越した津軽は古くから米の名産地でしたのに。

C氏 あそこはヤマセといったかな、食物が育たない地域。

今野 で、耕地がなかったんですよ。

C氏 だから木だけなんですよ。

今野 しかも戦後、耕地がなかったために明治初めから昭和20年までは軍馬生産だった。これが結構カネになったんです。

C氏 それもありますね。

今野 馬というのはいまの自動車産業ですから。だから、農業地として開拓しようなんていう意思がある意味では弱かったところですね。

A氏 リンゴもとれませんしね。

今野 ところが、帝国陸軍がダメになってから馬は全く商品価値がなくなってしまったでしょう。だから下北の経済の中では、戦後、帝国陸軍の崩壊による馬という商品を喪失したところから本当は歴史をしゃべらないとダメなんです。

C氏 陸地については。まあ、みんな連担しているせいもありますけどね。漁業はわりと根強いですよ。

今野 だけど、実は戦前の漁業というのは、あの辺は、北海道漁業を含めてだけれども、ニシンなんです。私が子供の頃はニシンというのは1匹単位で買う魚ではなかったですから。バケツ一杯単位でした。

C氏 ニシンとかイワシとかみんなそうですよね。

今野 ええ。それが、あれは昭和30年くらいですかね、途端にニシンがとれなくなった。それでニシンが食えなくなってしまった。いまだに原因はわからないらしいですけど。

A氏 人の流れでいくと、日本という国は人の流動が結構高いわけですね。いまでも、100人あたり都道府県を越える人口の割合が確か2.5%。ヨーロッパでは1%ぐらいですよ。だから非常に人の流れが激しい。確かに昭和30年代、40年代に比べるとちょっと縮まっていますが、それでも2%ぐらい。江戸時代はあまり動いていないわけですね。明治時代あたりから、人が動くようになってきているんですか。

今野 ただ、人が動くこの日本の社会というのは、欧米と対比すると、明瞭なんですよけれども、その下地は参勤交代です。江戸時代につくられています。背後に政治の力があるけれども、あんなに大きな人口が移動したのは世界の歴史の中でないんですね。しかも定期的に。だって半年しか殿様はいられないのです。年に1回は江戸へ出てきて、あと半年は住んでいなくてはならない。それにお伊勢参り。日本は世界に類例もない人口流動社会ともいえます。明治以降農村から都市へ、地方から三大都市圏の人口移動は江戸時代からの農業が社会的改革なしの零細農業のままで人口培養力が大きくならなかったのに関係していると思います。

B氏 平和なのにそんなに動いたということですね。

C氏 戦争ではなく人口移動があったというのは、ヨーロッパの歴史ではないですね。

今野 あれが江戸の町の歴史をつくるわけです。武士階層はみんな女房子供をふるさとに置いて出てくるから、セックスのはけ口になって吉原が流行った

んです。

A氏 日本人はもともと動かないのが、高度成長で動くようになったという話がありますけれども、そうでなくて、大和朝廷ができたときも動いているわけだし、それから室町時代あたりは、安倍一族とか、東北のほうからずうっとものすごく動いているんですね。

今野 そうです。先ほど、人口がこういうふうに波動的だと言ったでしょう。人口が急増しているときというのは、現代から見ると明治から今日までですね。その前は戦国時代から三代将軍まで。戦国時代から三代将軍までの人口の増加というのは3倍なのです。1,200万人が3,000万人になって、江戸中期に3,500万人になります。

その前がいつかということ、武士政権が誕生したときです。これが700万人から1,200万人、約倍になるんです。その前は統一国家ができたときで、奈良朝、それから平安京が設置されるまでです。これが300万人から700万人。その前が弥生式農業の展開で、70万人が200何十万かになる。そういう増加なんですよ。

そのときはどういうふうにして増加したかということ、最も明瞭なのは、鎌倉時代、藤原時代の末期、農機具に鉄が使われるようになって、それによって開墾能力が増えて、それで平野に - - 関東平野が主体ですけれども、そこにだれ込んでくるわけです。それが関東武士となるわけです。つまり平安時代に守護や何かを決めまして、最初の段階は京都の貴族が「何々の守」で現地に赴任しましたけれども、あれがあっという間にサボるようになるでしょう。サボるようになってみんな京都から行かなくなってしまうけれども、素直に現地に落ち着いたのが後になって武士になるわけです。これが東国の源であり、西国の平家です。それがなぜ落ち着けたかということ、農機具の鋤の金属化です。それで次の戦国時代からの人口急増は、関東がまだ開拓余地が残っていた。そのあと特に大きかったのは、越後平野とか東北なんです。東北の開拓が猛烈に進んだということです。それで力をつけるわけです。

A氏 東北のほうは何故ですか。

今野 農機具がさらに安くなって手に入るという、技術開発と連動しているのです。

C氏 それともう一つは、今野先生ご専門の海上交通が……。

今野 海上交通が起きるのはその後なんです。

C氏 だけど、そこはみんな河川につながっているから、その周辺が全部農業開発に向かっていった。

今野 河川の交通を起こした原因は何かというと、源頼朝時代の人口急増は農機具の主たるものが少し金属を使えるようになった。ところが戦国時代になると、金属鋤床が中国山地とか東北でいっぱい出てきて、べらぼうに安くなってきて、農機具だけではなくて車だとか土木技術が発達するんです。その顕著な例が「信玄堤」なのです。武田信玄が信玄堤というのをつくって治水をする。治水することによって農地が開拓される。これが進むことによって、大河川の多い東日本の湿地帯が大生産地になります。それによって供給力が増え、江戸の都市開発で需要が出てきて、今度、河川を交通に使うようになる。したがって、河川交通が本格化するのには四代将軍か五代将軍くらいになってからなのです。

C氏 だけど、日本海文明はもっと早いのではないですか。

今野 いや、それは個々にはありましたけれども、ああいう体系的な形ではなかったんですよ。それで、それによって商品作物化がさらに進むという形で進むわけです。その証拠は、伊達政宗が豊臣秀吉に、会津と米沢という東北

では一番のコメ産地を召し上げられてしまって仙台平野に移封されるわけです。そのときに伊達政宗がものすごくむくれて、こっそり徳川家康に相談に行くんですよ。

徳川家康は、東海の盟主だったのが未開拓地の多い関東平野に移される、その前歴があるから、「おまえ、黙っている、開拓の余地があるのだからこれから力になれるぞ」と。伊達政宗は手を組んで豊臣を倒そうと言ったのに、逆に説得されて仙台に落ち着くんですね。そういう経済があって、これの中身は山岡荘八の小説をご覧になるといいと思います（笑）。そういう歴史的な経緯があるんです。

これは、近世史をやっている先生から学生時代に聞いた話ですけども、伊達62万石とって、徳川家康は100万石約束したのに、宇和島10万石をいれても72万石で逃げるわけです。宇和島10万石とは、家康は伊達の力を削ぐため長男を分家にし連帯出来ないよう四国の片隅に封じこめます。この処置をなぜ伊達政宗は納得したかという、実はその前に徳川家康と盟友を組んで、開拓すればいくらかでも余地がある、西国は全く開拓の余地がない、力をつけられる - - というようなことがあったわけで、伊達は飢饉のとき以外は200万石あったともいわれています。江戸の米価は伊達領の米で決まるといわれ、江戸の町で伊達様と言われて派手な遊びができた原因なのです。

**A氏** やっぱ鉄器具ですかね。それと農業の品種改良もあったんでしょうね。

**今野** もちろんそうです。それと水利です。土木技術が発達していた。これは世界土木史の中に出ていますけれども、16世紀の世界における三大土木工事というのは全部日本列島です。それは、伊達の北上川付替え、関東平野の利根川の付替え、それから、濃尾平野の木曾三川工事、この3つなんです。

**C氏** その3つとも大きいですよ。

今野 ええ。金額的に言ってこれほど大きな土木工事は日本の歴史の中でないのです。それが関東平野と仙台平野が経済的な力をつけた基本なんです。それによって銚子の港とか石巻とかできるわけです。それで三大航路のネットワークが完成するわけです。

C氏 そこは農業の生産性が上がって人口増があった。それから参勤交代で人はかなり動いたというけれども、それは武家層についてだけの話でしょう。農民や何かというのは相変わらず移動はなかったんじゃないですか。

今野 そうです。農民は動けなかった。ただし江戸後期になるとお伊勢参りが全国的に起きるし富士講等も盛んになる。

C氏 それが動き始めたのは、むしろ徴兵制度が始まってからですね。

今野 そうです。だけど、その下地として参勤交代が力があった。参勤交代によって半年たつと帰ってきて、武士階層が情報の媒体になっていたんですね。だから、江戸には行けないけれども情報はわかっていた。吉原に行くといい女がいるとか何とか、みんなわかっていたわけです。その情報がなければ、幕末にお伊勢参りが急激にブームになるとかああいうことはあり得ない話です。

A氏 だから日本人というのは江戸時代によく歩いたんです。草鞋だけでね。

C氏 一生に一回だけね。

今野 「講」で。

A氏 私の九州でいくと、やはり人口増大の脅威というのがあって、大体は軍隊と外国移住でしたね。

今野 そうですね。広島とか和歌山とか、西へ行くとそういうふうになるんです。

C氏 平地がないからですね。

今野 ええ。

A氏 広島、岡山はほとんどサンフランシスコへ行ったり、九州は南米へ行ったり。それから軍隊ですね。農家の次・三男は大体軍隊。軍隊に行くしか生きていく道はなかったと思います。

C氏 満蒙開拓団みたいな。

今野 それは世界共通でしょう。近代国家をつくるにあたって、植民地から逃れられて軍隊が強くなれた国に共通していることは何かというと、軍隊のほうで自分の家で食う飯よりうまい飯を出したところが、植民地にならないで済んだというんです。強い軍隊と生産地の口べらしで。富国強兵の基礎ですね。

C氏 そう言われていますね。

今野 ええ。ところが、いま日本で自衛隊は刑務所よりまずいコメを食わされている（笑）。

A氏 私が小さいときでも、熊本というのは防衛大学に行くのが全国でナンバーワンでした。で、防衛大学の制服で帰ってくるときにみんなで大歓迎するわけです。これはすごかったです。特にその中で海軍なんて、もうすごかったですよ。

今野 戦前は、日本国内で一番強い軍隊は第二師団の仙台か第六師団の熊本です。だから一番つらいところへ、仙台と熊本の師団はやられているわけです。

A氏 軍隊に行くしか生きる道がないわけだから、行ってめちゃくちゃ頑張るわけですね。

今野 そうです。家にいるよりうまい飯を食わされるから。熊本みたいに団子汁で腹を満たされるよりは（笑）、少なくとも白米の飯を食わせてくれるから張り切っちゃう。

A氏 第二師団というのは強かったみたいですね。関西の軍隊はすぐ逃げてしまっただけです。

今野 そうそう。大阪と名古屋が一番弱い。

A氏 もとに戻ると、吉田達男さんがしょっちゅうおっしゃっていたのは、人の動きをウォッチするのが国土計画の一番基本だと。人口総数が減るというのは、三全総のときにあったというのはいまわかりましたけれども、どういう形で人が動くかという話が、日本ではコーホート法ではそこはとれないわけですね。日本の人口推計技術は世界の中ではかなり進んでいると吉田さんはおっしゃっていましたが、これは人間の英知を超える話ですよ。

今野 私なんかもこの問題でずっと飯を食ってきたから、ライフワークになりましたね。結局最後に取りまとめたのは、小さい版で「アジアの経済成長と工業化・都市化」。やっぱり工業化ということですよ。近代の人口移動というのはそこがルーツなんです。工業化は、アルフレッド・ウェーバーではないけれども、「集積」でしょう。集積することによってコストダウンが図られるというメカニズムが働きますから、それによって工業は、1工場が単発立地では

なくて集積立地するようになってきて工業地帯になるわけです。で、工業地帯の究極的な姿がメガロポリスです。

私はずっとその問題で頭を痛めてきて、自分なりに到達した結論はそこですね。それは実は前例としては、イギリスの中部とか、ドイツのライン・ルール地域とか、アメリカ東岸。あれはみんな集積化ですよ。だから、近代工業をベースに経済に置きかえたところはみんなメガロポリス化が進んできている。そして日本列島で我々はやった。しかし、「本当だろうか？」という段階で、私なんかの人生は、霞が関にいましたけれども、中国が成長してきてまさしく中国はその道を歩んでいますから、経済と人類発展ということからすると基本に据えていい大原則ではないかと私は思っています。

**A氏** 工業化によってメガロポリスができるという、日本の歴史を積み重ねてきた。ところが、四全総になると今度は、工業化ではないファクターでメガロポリスできた。そのところはどういうふうに解釈したらいいのか。

**今野** そこはいまだに結論を得ていないわけですから、我々こういう研究会をやっても、それは声を大にして言っていると思いますが、歴史的に言っているこの間まで - - 厳密なことを言えば昭和20年まで、第一次産業の従業者が50%を占めていましたから、それまでの日本の人口移動は農地開発です。農地開発に引きずられてどんどん東に、東に来たわけです。明治初年の日本列島の人口重心は天津だったのです。それからどんどん東に移って、いま、中津川くらいに来ています。間もなく長野県に入ります。あそこだけで既に100キロ以上東に移っています。

その原動力は何かといったら、前半は農地開発です。東北・北海道の開発。それによって北海道は人口ゼロが550万になるわけです。それに引きずられてきた。しかも、人口重心らしきものをそれ以前に見れば、大阪平野でしたね。さらに、弥生時代の和歌山か北九州説でいけば、人口重心はたぶん広島あたりです。だから、ずうっと東に動いてきているわけです。それは農業開発によって

いた。

ところが、戦後の経済成長は何かというと、工業地帯、メガロポリスが引きずってきた。ということは、地域的には東京圏が引きずる原動力になってきた。それは明瞭に言えると思います。

A氏 その後で移ってきたのが、東京に……。

今野 第3段階は、ベーシック・インダストリーが工業から脱工業になる。それが東京一極集中をもたらした。そうじゃないと関西の地盤沈下は説明できないんですよ。

A氏 さっきの話に戻りますと、情報化が国土構造にどう影響するかということで行くと、吉田達男さんがおっしゃっていたのは、情報化そのものが国土構造を変える話じゃないのではないかと。情報化というのは世の中の全体の流れを加速化する。情報化にかかわらず世の中の大きな一つの大きな流れがあって、情報化というのはその中の壁を取り払ったり、それを加速化する役割がある、というようなことを吉田達男さんはおっしゃっていましたね。

今野 100%そのとおりです。農業が日本経済の中心のとき、コメというのは非常に厄介なことに労働集約型で、ものすごく労働を投入しないととれないのです。そのためについこの間まで日本列島では、農家が嫁さんをとるのは春の農繁期前と決まっていた。それで、いまだに東北や新潟へ行くと残っていますけれども、足入れ婚で試験期間があるんですよ。それが、春前の田んぼの作業が始まる前に入れて、働き者かどうかを見て、そして跡継ぎができる女かどうかを見て、正式に結婚するのは稲刈りが終わった後なんです。半年間試験採用です。それが慣習にあったんですよ。

そのくらい労働力投入と生産はぎりぎりの線で平衡を保って、コメはつくられていたのです。だから余剰生産力が弱いという大欠点があるわけです。その

点が小麦作とかトウモロコシ作の農業と基本が違うところです。したがって、コメをつくっているうちは決定的な飢えにはいかない、死ぬということはないけれども、余剰生産力がないから大金持ちにもなれない - - ということのどどのつまりが「五反百姓」の誕生です。五反以上広げられても、手がないうということですね。

それが日本の農地開発の非常に大きな制約要因になっていた。したがって、人口増加と関東平野の開拓、東北の開拓というのは連動するわけです。そこに移動があった、ということですね。

つまり、伊達藩のようにコメだけで食っていた東北の経済を見ますと、どんなにうまくやっても7割は自家用なのです、家単位ではなくて地域単位でいくと。それで、江戸に3割しか売れないのです。というのは、コメ生産の労働集約型生産体制をとらざるを得ないという原点ですよ。3割しか売れないときに必要な市場情報というのはどうなのか。いまだに市場認識ないですよ、東北の経済なんていうのは。つくるだけの経済で市場論なき地域経済です。ベーシック産業が一次産業から二次産業になると、市場情報の重要性は3割から5割くらいになったかもしれませんね、コメよりは。ベーシック産業が二次産業より三次産業と逆転して、7割、8割の市場情報に基づいて生産から販売からするようになる、というふうに変ってきているわけでしょう。そこに情報の価値が国土開発に及ぼしてくる影があると思います。

C氏 その間、食糧が全部食管で管理制度でもって……。

今野 そうですね。昭和14年の米統制以降の管理制度をはさみましたね。これがまた農民が市場経済の理解するのを妨げました。その隙を労農派社会主義が浸透したわけです。

C氏 結局、統制経済で物の移動が全部コントロールされていたという段階。

今野 ただ、あれは正式には米の統制以降ですけどね。

C氏 だけど、戦後ずうっと尾を引きましたよね。

今野 ええ。むしろそういう社会主義が、労働集約型の余剰生産力が乏しいコメづくりと合ったわけです。

C氏 維持できたということですか。

今野 そうです。そこから出てきた英雄が社会党左派の佐々木更三だったわけです。

C氏 土地の収用制度もそこで変わりましたね。

今野 あるいは、日本の労農派社会党はみんなそれをベースにしていたわけです。ある意味では、ロシアの農奴制とソビエト革命と連動しているのと同じようなことがあったと思います。

A氏 話はもとに戻りますと、四全総の総点検があって、それから第五次全国総合開発計画につながっていったのか、四全総の総点検があってそこでやや空白があって、新たな話として第五次全国総合開発計画が始まってきたのか、その辺は今野先生はどういうふうに理解しておられますか。

今野 だんだんそのインパクトに当たることが弱くなってきたことは事実だと思います。だから国民が関心を示さなくなってきた、何といたってもそこに出ていると思います。つまり、石油ショックが三全総だとか、高度成長が二全総だとか、飢餓からの脱出から一全総が出てくるとか、国民生活全体が危機に直面してショックな状況というのがなくなってくるわけです。それは石油ショ

ックと三全総で終わったのかもしれませんがね。国土政策が不要だと言われるようになってくる根底はそこだと思います。豊かになって政策欲求度が下がったのでしょう。政策や改革は危機がないと生れないといえるのではないですか。満足度が高いと保守的になるのは自然でしょう。

C氏 国土政策よりも経済計画が七カ年計画と「生活大国五カ年計画」と、そのあとも経済審議会の委員をずっとやっていたけれども、七カ年計画のときはまだまだ息をしていたんですね。ところが生活大国が終わって、それからもう、「計画経済ではない」という議論のほうが大きくなってきた。それと国土計画へのインパクトが弱くなったのと同じ時期じゃないですかね。

今野 ただ、戦後の55年体制というのは政府の政策体系からいくと、国土計画と経済計画は横に結んだ両輪だということで軸にしているのです。だから、経済計画論と国土計画論が全部連動しているわけです。その辺はNIRAから出した星野さんの『経済計画の終焉』、こんな分厚いやつ、彼はこの問題を綿密に書いてありますね。したがって経済計画が不要なり消滅したのは国土計画にとっては片翼エンジン飛行機になったといえるのではないですか。

C氏 だから、そこら辺で終わったということですね。

今野 そうです、終わったんです。経済計画が終わったから否応なしに国土計画も終わりともいえます。

C氏 計画という言葉を使うなという議論さえありましたね。

今野 そうですね。ただ計画は政策の一部と考えれば計画がなくなって良いかという別の見解と課題があります。計画経済的計画は不要としても、また経済は政策から独立した市場経済に委ねても、市場経済の進展の中で補完すべき

政策や国民に基本的見通しを示し、かつ金融税制等を政府としてどう動かすかの政策はなくすわけにはいかないでしょう。「神のみえざる手」をどう読みとるかも含めて。

C氏 あれは90年に入る頃でしたか。

今野 ええ。

C氏 だから五全総は何だったかという。

A氏 もう一つ、四全総がバブル経済を引き起こしたという、「四全総犯人論」というのも多少ありましたね。その辺は今野先生はどんなふうにお考えですか。

今野 四全総は、三全総が小さく内向型になったでしょう。これではイカンということになって、東京一極集中の問題意識と景気の良さに反映されて、再び第二の新全総へと。これが宮沢内閣の内需拡大論と符号したわけですね。その符号したところが、バブルともつながり、政策責任の一端としてそういうふうに批判されることになったわけです。

A氏 例の430兆円の、アメリカと約束したという公共投資。

今野 ええ。それからあの頃は、貿易不均衡是正での対米円滑化のみからの政策展開で輸入品フェアとか、輸入ワインを飲もうとか（笑）、やったじゃないですか、総理みずからデパートへ行ったりして。あれと符号したのだと思います。その後、不況に陥ってしまうし、結果としては、その煽ったやつがバブルに対して大きく寄与もしたんですよ。

C氏 いまの輸入フェアとか何とかというのもあれだけど、その頃になって初めて、そういう国際的な場の中に日本の経済がさらされるようになったということですね。

今野 そうです。グローバル化したということですね。

A氏 バブル経済を四全総が引き起こしたと私は思いませんが、ただ、バブル経済に対して国土計画という面でいくと、四全総は無力だったという面はあるのではないかと思いますね。

今野 そうです。自由主義経済にとって舵取りは非常に難しいんですけれども、自由主義経済体制の中で政策というのはどうあるべきか、という基本を議論しなくてはならないと思います。だけど、少なくとも部分的には自由主義経済に対して対極的な立場にあるのが政策です - - という一面があることは事実なのです。

下河辺さんの哲学はまさしくそれなんですけれども、自由主義経済に対して我々が計画で対応していくというのは、これがアクセルだとすればブレーキ役なんだという役割ですよ。それを単純解釈しますと、四全総はブレーキ役をうまく果たさなかったということです。アクセル型になっていってしまったという一面があるかも知れません。

A氏 話はズレますが、政策が少し変わってきて、確かに自由主義経済に少しブレーキをかけたりコントロールするのが政策だと思います。ところが、現在の小泉内閣の政策というのは、むしろ自由主義経済のネックになっているところを取り外してやろうという考え方ですね。だから、政策自体がいま変わってきている。

今野 ブレーキを外してしまおうと。

A氏　そうです。百八十度変わってきているんですね。

今野　そうです。私は社会主義者ではないけれども、ブレーキになるといったときに2つの解釈が出てくると思っています。一つは、反対勢力がそれで勢いを得て、とどのつまりは社会主義的発想になっていくということです。だから福島瑞穂の質問にしても、「日曜討論」の主張にしてもそれなりにわかるんですね。だけど、自由主義経済で進んでいくことを基本にしているとすれば、ブレーキの踏み方は、止めるのではなくて、自由主義経済でカバーできないところをどう補完するかというところに政策はあるべきだと思います。そうすると、これのとどのつまりはヨーロッパ型のソーシャル・ポリシー論になってくるかと思っています。

ところが、いま、国土計画がなくなったり、経済計画がなくなったりしているのは、二極対決論の中で処理されてきているから、ついでに補完する政策論まで消されてしまっているのではないかという心配を私はしているわけです。その流れがあって非常に不幸になっているのではないかというのが一つです。昔の無政府論や夜警国家論に戻るのかという想いです。

第2の答えは何かというと、全国計画というのは、内政の中心的な位置を占めさせてもらって50年間機能してきたというけれども、それは「貧しさからの解放」を基本目標にしていた。その貧しさからの解放の根底は何かというと、人口急増です。人口急増をベースにしてきたから、とにかく豊かにならなくてはならない。そこでイコール、方法論、戦略論としては、開発・発展というこの4文字に収れんされていたと思います。開発・発展に収れんされていったときに、自由主義経済体制の中で政策が利用できるというのは、極端なことを言うとき好況のときなんです。つまり、どんどん量が大きくなってきますから、それがやれるということだと思います。

その一番いい例が、一全総の新産・工特だったと思います。それで高度成長になってそれに乗れたから、抵抗なく政策目的に近い線に日本列島を塗りかえることができた。ところが、新全総になって一つつまずいたのは何かというと

石油ショックですね。で、石油ショック後のあの不況でつまずいたわけです。けど、わりに短期間に持ち直してくれた。三全総が出た後で持ち直してくれたんだけど、持ち直したから三全総の影が逆に薄くなって、四全総に突っ走ってしまった。四全総が閣議決定して意思決定した後の経済はどうかというと、バブルを経て長期的な不況に突入してしまったでしょう。

だから、本来であれば結果論なんだけれども、四全総が、不況に対する計画、つまり低成長化したときの計画として哲学から組み立て直すとはよかったかなと思うんですね。それまでの全国計画は、三全総という力のない計画を別にする、低成長下での経済に対応する国土計画論というのをやっていなかったのです。

ふりかえりますと人間が考え構築する政策というのは100点はあり得ない。規制緩和で経済活性化を図るのは市場経済として本筋であり反対する理由は何もない。ただし100点に届かない分をどうやって補完するのかの冷静で論理的検討、つまり市場経済での政策を忘れてブーム化してい過ぎるのではないかという潜在的危機感です。十分議論したいところです。

A氏 そうすると、90年代というのはバブル経済が崩壊して低成長に入って、なおかつ、そのところを公共事業で何とかカバーしようということで公共事業をふんだんに出して、それがいまの財政破綻に結びつくわけですね。そのときに五全総に突っ込んでいった。そうすると、五全総というのはまさに低成長時代であるし、その中でまた公共事業、いわゆるケインズ経済学が華やかなりし時代のそのときに第五次全国総合開発計画を考えようということですね。そのところのベースがよく理解できていないのですが。

今野 そこは答えになるかどうかわかりませんが、5回、全国計画を立てて、一番かわいそうだったのは五全総ですね。五全総が何故一番かわいそうな立場になってしまったのかというのは、不況のどん底でどうしようもなくトンネルの出口が見えないときに立てるのに、形式だけ1から4までを真似てきたわ

けです。そこは論理的にいくと、計画だけで対応しようとした無理が一つあるのではないかと思っています。逆に言えば、低成長、不況のときの国土づくりとは何かという基本問題を、1～4までの先輩連中が議論しなかったということでもあります。それは率直に言うと、我々下河辺派の限界でもあるのかもしれませんが。

国土計画の開発手法というのは、むつ、苫東でも明瞭なように、法律とかマネジメントとか管理とかそういうことではなくて、ユージングスをあまり考えないでプランニング&ディベロップメントなんです。それに対応しようとしていたわけです。あの方法論は、不況、低成長の経済では対応しきれないで崩壊した、こう思っています。だから、それを十分に反省すれば、国土がどうあるべきか、生活舞台がどうあるべきかなんて不必要だ、という答えは出ないんですよね。そのかわり、低成長経済の不況のときの国土計画はどういう計画であるべきかということ、プランニング&ディベロップメントよりもっと幅広げた形で政策を組み立てればよかったわけです。それができなかった。

**A氏** 第五次の全国総合開発計画のとき、その辺のところがかちんとした方向がないままにとにかく入って行ってしまったという印象を持っていますが……。

**今野** そういう方策論の基本的な問題があるのを見逃して、つまり経済社会が本質的に変化していることを十分ふまえないで従来の方法を踏襲して計画策定をしていったという方法論をそのまま受け継いだところが、審議会をいくら開いても答えが出ずに行詰ったのではないかと考えてます。

**C氏** 例えば国際化の問題にしる情報化の問題にしる、それから、その後の新しい産業の発生という問題について、そういうものの考慮というのはあまり入っていないんですね。

前回、国土計画を遂行する組織というものの歴史的な変遷をお伺いしたけれ

ども、その体質はこの段階でも変わっていないと。

**今野** 人間が代わっていないですからね。人間と言うと変だけど、畑が。つまりそれを壊すためには、霞が関の国家公務員の上級職だけでいいから、経済職とか法律職とか土木職、あれを壊さないとダメなんですよ。自由がきかないのです。そもそもこうした縦割りの弊害は官庁をルーツにしているのではなく学問領域や大学の組織からあるわけで、全体をみる人がいないとか専門バカ集団化しているとか社会全体が病んでいます。社会を柔軟化する戦略と対応が必要だと思います。

**C氏** 今度、国土交通省の所管になってしまうとますますおかしくなるけれども、そうではない段階でもう少しその議論というか、成り立ちの可能性があったんでしょうね。

**今野** それは全省庁全社会でやらないと意味がないでしょうね。国土交通省なんて言ったところで意味がない。縦割りを温存して切った貼ったで数を少なくしただけですから。

**A氏** 第五次全総が「グランドデザイン」という形で、国土のデザインを描いた。ところがよく読んでみますと、従来型の全総的な、例えばどこに道路をつくる、このプロジェクトをやるというのは結構書いてあるんですね。

**C氏** そこは変わらないんだよ。

**今野** そうなんだけど、五全総になってみるともう書きようがなくなってしまっている。

**A氏** ただ、個々のプロジェクトについては一応四全総と同じような……。

今野 同じでしか書けないわけです。新しい計画論としてないわけですよ。五全総の閣議決定までは審議会の委員をさせられたけれども、私の知っている範囲内で五全総を褒めてくれたのは木村尚三郎先生だけだね。

A氏 どんな褒め方をされたのですか。

今野 故人となられた木村尚三郎先生に、「五全総、政策で困ったのはありあり見えるねえ、今野さん」と言われたんですよ（笑）。「政策になってないね。だけど、歴史を読み取ろうとした態度は私は評価してやる」と、褒められました。

A氏 歴史といいますか、「日本民族とは何か」みたいなことを五全総から読み取れるという面はありますね。

今野 ええ、木村先生が同じことを言っていました。「そこは評価してやる」と言われましたよ。

A氏 喜んでいいのか悲しんでいいのかわかりませんが（笑）。

C氏 いわば変化の兆しがあったということですね。

今野 だけど、歴史だけでは20省庁押さえられませんからね。

A氏 個々のプロジェクトを一応書いてありますけれども、四全総までは、そこに書いてあるかどうかで世の中がものすごく着目して、非常にそこに対してナーバスだった。五全総は、書いてあるんだけど、書いてあるかどうか、世の中がそれに対してあまり意味を見い出せていなかった面があるのではない

ですか。

**今野** そのとおりですよ。『日本人とユダヤ人』という本があるように、目先のことでしか価値がわからない1億2,000万の国民を前にして、歴史だけで説こうとしても説けないですよ。そこが五全総の評価論だと思います。だけど、客観的なこういう場での議論としては、もっと真面目に、どういうところが問題だったかということは議論してもいいですね。

**A氏** あの中の国土軸というのは、確かによく見ますと平安時代からあるんですよ。

**今野** ありますよ。あんなの説がなくたってそのとおりで、奈良朝時代の山陰道だとか、北陸道だとか、東海道だとか、あれが国土軸なんですよ。それをいまだに引きずっているわけです。日本列島という国土の宿命かも知れません。本当にそう思いますよ。

というのは、私は東北でしょう。東北というのは東山道だったんですね。江戸ができたためにルートがわからなくなってしまったけれども、碓氷峠を越えて、前橋を通過して宇都宮へ出てきて、白河関を越えて仙台に来るとというのが東山道なのです。東海道は、静岡から神奈川に来て、神奈川から海を渡って房総半島に行って、安房、上総、下総、常陸に行って、そこから先はないから……。

**C氏** 昔の鎌倉街道。

**今野** いいえ。これ以上は太平洋でないというので、鹿島・香取を祀ったわけでしょう。だからもともとは、私のように仙台を中心に生活していた連中から見ると、江戸に出てくるなんていうのは、とんでもない、ルートを踏み外したルートなんですよ。そこを、徳川家康が日光を祀って日光街道をつくって初めて江戸に出られるようになった。もともと仙台とか福島というのは、北

関東を通過して長野、塩尻に出ていったわけです。

A氏 桐生とかあの辺。

今野 そうです。両毛線を通してね。それを江戸に町をつくったものだから、東海道という海の道、こっちは山の道と。奈良朝というのはすごい科学的な名前のつけ方をしたと思っているわけです。

A氏 前にお話したかもしれませんが、吉田達男さんがあるときかなりシビアなお話をしておっしゃっていて、「地域連携軸」の考え方に対して、吉田達男さんは、地理はザインの世界で生きておられるけれども、いま我々はゾーレンの話をしている、あなたは場所が違うのではないかとおっしゃっておられた。

昔は何とか道だったわけですね。道といっても道路ではなくて、人が生活する範囲なんですよ。

もう一つ、下河辺さんに、「国土軸論は私も大体わかりましたけれども、しかし、日本海国土軸というのはどうも実態と違うような感じがします」と言ったら、当初の原案は2つだったと仰っていました。山陰国土軸、山陰から九州に行く国土軸と、京都で分かれて北陸から東北に行く国土軸。「それだったら私も歴史的にもわかります」と申し上げた。

今野 その議論というのは、川村瑞賢によって江戸時代の三大航路が完成するでしょう。そのときに日本海側の北廻り航路というのは江差から来ますね。江差の先は、アムール川の中下流に清が築いた交易の大都市があったんです。それがロシア民族のイワン侵略戦争でつぶされて灰塵に帰すわけです。灰塵に帰してから、アムール川、日本海側を通過して江差と十三湖に来る大陸の文化が流れてくるというルートが断ち切られたわけです。ロシア人に横から入られて。

間宮林蔵なんていうのは、その都跡を探しに行ったわけです。それでアムール川をのぼったんです。そのルートがあって、そのルートは、東北や新潟が力をつけて南におりてきますね。コメや染物やニシンやらを持って来るでしょう。それが敦賀でふた手に分かれたんです。軽いものは敦賀・小浜にあげて山越えしたわけです。重いものはあそこは山越えできないものだから、下関を回ったわけです。だから、西廻り航路という近世日本の、東海道線ですね、一番の大動脈というのは、下流に来て2本の流れになった。

A氏 例えばサバなんかはここでおろして、鯖街道になって、小浜や敦賀から山を越えた。そうでないやつはこうだったんですね。

今野 そうです。それで近江の塩津にあがって、琵琶湖を通過してそれが全部大津にあがったから、あれは大津なんですよ。大きい津なんです。

そういう意味で日本海国土軸というのは、奈良朝時代に北陸道と山陰道になっていたけれども、地政学的なことを言えば、幕末あるいは明治の半ばまで - - もっと後までかもしれません - - ところが鉄道の時代となって日本海縦貫の鉄道が全通したのは大正11年ころですから、それまで機能していたわけです。そういう背景があるわけです。

だから、下関から北海道まで日本海国土軸だと言っているのも無理ない話ですし、北陸道だ、山陰道だと言っているのもそれなりに歴史的背景はちゃんとあるわけです。どっちも対立している話ではない。

A氏 吉田達男さんにお会いした最初の頃に、国土計画を考えるときに縦軸と横軸をちゃんと考える、それに合わないやつは絶対だめだと言われました。横軸というのは歴史だ、縦軸というのは自然であり人間の知性で、これは必ず連関している。これを外れたものはダメだ、と。

だから、東京のことをまず勉強しろと言われたときに、『東京の自然史』という貝塚爽平先生の本と藤森昭信さんの『明治の東京計画』、この2つをまず

読めと本を渡された覚えがあるんですね。

**今野** 私も、吉田先生のそういう教育を企画室長時代から受けていたから、その影響が残っているのかもしれないけれども、国土計画とは何か、国土政策とは何か、一言で書けと言われたら、「国土空間をめぐる時間軸と空間軸、その相関を求める政策である」と考えています。

**A氏** 時間軸は横軸の歴史で、空間軸は縦の自然であり知性と。

**今野** 国土計画というのは中央政府の権限なのです、地方政府の権限ではなくて。だから、地域軸が連携すれば国土軸になるなんていうのは暴論以外の何ものでもない。国家として何をやるか、ということです。

したがって最近、「計画主体論」を空間軸の中で考えないとダメだということを書いているんです。そうすると地域政策と国土計画というのは、中央政府がやる政策論と地方政府がやる政策論と重なるところもあるし、異なるところもあるから、そうすると地方分権はどうあるべきなのかということと関連する話である。間もなく駒澤大学で論文をまとめてくれますけれども、「地域政策の原点」というのを書いたんです。これは地方分権下による地方政府の計画なのであって、国土計画とももちろん密接な関係はあるけれども、国土政策そのものではない。国土政策の責任を持つのは知事ではなくて総理大臣です。近代社会では近代国家をつくって初めて一人前と認められる世界ですし、国土概念それにより世界的に定着したものです。国家が主権を委ねられ責任を持っているわけですから、その意志は明確に国民に示すことは避けられません。否定論では通りません。

**A氏** 五全総のとき、川勝（平太）さんはどんなスタンス、役割を果たされたというふうに今野先生は見ておられますか。

**今野** 川勝さんは非常にいい刺激をしてくれましたね。「海洋国家日本を忘

れるな」ということです、一言で言ったら。

A氏 そういう点でいくと、確かにいままでの国土計画論にはなかった面がありますね。

今野 なかったのは2つ理由があって、国土政策は25年の国土総合開発法以来、内政にされてしまったでしょう。それで国境の外は手が出なかったわけです。多少手を出したのは三全総のときの海洋論なんですけれども、あれは二百海里問題とちょうど時期的に合ったものだから、何らかの答えを書かなくてはならないというので……。

A氏 三全総のときも海洋論はあったんですか。

今野 ありましたよ。閣議決定にかけた地図なんて、わざわざ線を引かないで出したわけです。

A氏 そうなんですか？

今野 ええ。北端と南端と東端と西端だけ地名を入れた日本列島の地図を、閣議決定しますとって、官房から「これは何だろう？」と言われてね。しかし、ここで線を引いてしまったら、北方領土で火を噴くか捨てるかになるし、それこそ日ソ平和条約を結ばないうちは国土計画を立てられなくなりますよ、というきびしい問題の中で日本の自己主張を出したのです。

A氏 川勝さんの海洋論というのは、三全総の海洋論とはちょっと違うわけですか。

今野 彼はもっと地政学的ないしは文明論的な立場で言っています。彼の見

解は非常に面白い。あの人も経済史だから歴史屋で、史的な見解から言うから大きい観点から言ってくれますよね。彼は、海洋国家対大陸国家の対立を軸に置いてものを言っています。そういう意味で非常に面白い見解だし、トインビー、クラウスゼッツ、ハンチントン等とも一脈相通じ議論のタネとしてはベースに一つ持っていなければならない話でもありますね。

A氏 四全総といい五全総といい、世の中のいろんなファクターが複雑化して、その中でまた計画論という形で、その足場を崩さないでやっているわけですから、人間の英知からすると相当超えたことをやってこられたのは事実ですよ。

今野 そうですね。

A氏 その中で五全総は、人々は全国総合開発計画として見ているわけですが、日本民族のデザインを一つ変えたんだというふうに考えればいいのかもかもしれませんが、何かこう率直な感じとして、非常に寿命が短かったという印象があるんですね。苦労してつくったわりには寿命が短かった面がある。

今野 そのとおりですよ。つまり歴史の評価だけはあったというのは、計画立案ということからすると、本体に触れないで序論だけで終わっているという形ですね。特に近視眼社会の日本では具体的プロジェクトの認知という点からだけ国土計画が期待されているのに、それぞれの地域のプロジェクトがないものですから短く感じるわけです。つまり国民的な評価は、まあ、残念なんだけど、俺のところの道路をどう書いてくれているか（笑）、あるいは俺のところのダムづくりをどう書いてくれているかということだけですから、もう情けない話。

A氏 おっしゃるように確かに序論だけで本文はない。ただ、世の中一般の

人が見る本文というのは、道路がどうだ、何がどうだという本文でしょうけれども、今野先生からご覧になると、やはり日本の国土をどうするかという本文でしたね。で、どっちの本文も書いていないと。日本の国土をどうするかという本文も書いていないと考えていいのですか。

**今野** 書く背景がなかったというのが正直なところでしょう。具体的プロジェクトがないのは認められませんよ。この背景からすると五全総は全体として弱いことを補完出来ませんでしたから総論まで弱くなかったのではないでしょうか。

**A氏** というか、書けない。

**今野** 書けなかったでしょうね。方法論的にも行き詰ったといえます。開発アレルギーと財政と未来不透明の三重苦で新方法論を検討し、見出すことが出来なかった。

一全総、二全総、三全総と並べてきて五全総まで、出来がよかったか悪かったかというのは評論家としては大変面白い話ですよ。だけど実体論として、全国の基本計画というものがそんなレベルでいいのかということこそが問題だと思います。民主社会は衆愚に陥りやすいのは100も承知で。

**A氏** いま、世界の中で国土計画というのをつくっている国は、まあ、アメリカという国は昔からつくりませんからね、そういう点でいくと……。

**今野** そのこのところはこの後、まとまった議論の一つのタネにして議論したいと思いますが、フランスでは国土開発的プロジェクトというのは時限法ですね。だから、日本のように全国北から南まで全部なめていて、それでというのが本当にいいのかというのは、率直に言ってありますよね。北海道・東北開発だけに限定して言うとしたら、イタリアの南部開発論と対比できるけれ

ども。しかし国土総合開発法の体制確立当初は北海道東北に限られた考えがあった（東北は中間で悩みだったが）のが一挙に全国の地方が参入し最後は国土庁設置で開発と整備までが一つになって資本主義国として異例になったともいえますね。

もう一つ戦後の出発点で先進国との対比をすれば国全体の水準（経済・国民生活）が低くストックがないという状況と宿命的ともいえる食糧難があったことも大きな原因でしょう。

C氏 戦略的なプロジェクト論なんでしょうね。

今野 そうですね。

A氏 フランスもやっぱりプロジェクト論でしょう？

今野 吉田先生の社会資本ABC論の背景の一つはここにあると思っていますが、必要以上にプロジェクトが必要だった背景があったといえます。石の文化と木の文化の違いにもつながりますが、プロジェクトを書かざるを得ないというのは、どんな時代になっても逃げられないと思います。というのは、自由主義経済で自由競争をどういうふうに展開できる国土かということからチェックして、その中には、自由競争の中で生まれにくい基盤整備という領域があるわけですから、政府の責任をそれについて書くことはどんな時代になってもあり得ると思います。それを書かなくてはダメで、それが日本での国土計画だと思うんですよ。固有の特殊条件でしょうか。

成田なんていうのは自由競争が展開できない空港でしょう。羽田だって。自由主義経済国家だと言っていて、21世紀の交通の中心は航空だなんてよく言えるなあ（笑）。全部矛盾してますよね。

C氏 本当ですよ。

今野 それに対して、それをどうするかというのを書くのが国土計画だと思うのです。

C氏 空港だけじゃありませんよ。航空運賃から何から全部コントロールされているからね。

今野 そうそう。そこに路線で入りたいというのを断っているわけです。この間の大臣通達だってひどいですよね。神戸空港には国際線は一切入れない、なんてね。競争させないと言ってるようなもので本来は入るか入らないかは市場がきめることですよ。

C氏 オーストラリアとかニュージーランドとか、例えば英国の財団みたいなのがやるとか、全部外資が牛耳っている面がたくさんあるんですね。

今野 ありますね。

C氏 日本はやっぱり純潔主義なんですかね。国内計画で出発したから国のプロジェクトは国が管理すると。こういう仕組みだったんですかね。

今野 資本不足・ストック不足からくる供給条件不足、戦争前後の統制経済、地方自治なき近代国家誕生の上に立つ日本的中央集権国家体制が自由競争を抑制していますが、私なんかのジェネレーションが国土計画、国土政策に従事した原点は、とにかく1億の国民の生活を豊かにしようということでしたね。そのためには、資本主義経済がいま十分に発達していない、それを何とかさせることをやろうという点ではすっきりしていたと思います。それで、開発が進んだ地域か、開発がなされていない地域かと国土を切り分析していったわけです。皿に出すために羊羹を切っていた。

五全総が行き詰まったというのは、そういう点では役所のいまのシステムと  
いまの役人の能力から言って、無理だったといえればそれまでなんだけれども、  
本来であれば、38万平方キロの国土の中で自由競争が展開できている国土はど  
こか、それがされない国土はどこか - - ここから出発すべきだと思います。地  
域的体質的には前近代的体質が残る地域が多くありますから、それをどう近代  
社会に組入れるか、こういうことだと思うんですよ。

極端なことを言うと、成田は赤信号が灯っている。そうかといって、いまの  
面積の倍とって4本の滑走路を6本の滑走路の空港にしるといっても、物理的  
に無理だとすれば、次善の策として、成田の負担を少しでも軽くするための手  
段はないかということになる。そういうことが本来の政策ではないのか。羽田  
の第4滑走路はあるかもしれないし、北関東3県は全部で人口700万あるのに  
空港は1つもないから、各県に責任を持たせて1つずつ空港をつくって、その  
空港と成田をアクセスで結ぶことで少しでも羽田と成田の負担を軽くしてい  
くという形で、自由競争により近い形のもので展開できるようにしてやるのが国  
の責任だと思います。

そうすると成田問題、羽田問題というのはどうなのかということ、北関東3県  
の空港開発をどうしていくか、それとの連携をどうするかということになるけ  
れども、それは誰も言ってないですよ。そういう答えを出して、航空政策の  
国土交通省航空局と計画を立てる国土計画局がチャンバラをやっているとい  
うのであれば、これは正当な議論をしているなと思いますけどね。

A氏 その辺の議論がむしろちゃんといわれなくなっていると思います。例  
えば埼玉の渡良瀬に湿地帯がありますよね。あそこに空港をつくるという案が  
ありましたね。そうすると栃木、群馬、あの辺の人たちはみんなそこを使う。  
しかもそれは国内線でいい。その辺のことがいまはもう、議論の場がなくな  
ってしまいましたね。

今野 されていないでしょう。茨城、栃木、群馬、埼玉、それじゃみんな国

内航空を利用していないのかというと、そんなことはない。羽田へ来ている。ところが、一銭も羽田に対して負担していません。地方の府県は5割負担しているわけです。こんな矛盾があっているのかと。石川県なんて、もし赤字になったら補てんしますなんて言っている。能登空港です。考えてみますとこれも歪みを受けている結果なんですよ。

A氏 事業官庁ではなくて、内閣かどこか - - 例えばフランスのダタールみたいなどころ、省庁でないところできちんと議論する場がないとダメですね。

今野 そうです。国土政策は、そういう意味では内閣官房に属してやらないとダメだと思います。縦割の国土交通省に入ってしまったとか。調整機能を失ったとか。組織論としては問題が多いでしょうね。この辺の議論もしたいけれども、そのためには、前にも説明したように「調整」ということに対して権限を与えないとダメなんです。計画というのは、ペーパープランになると無責任になってしまってダメですが事業行政に埋没してもダメなんですよ。

C氏 いままではどこが持っていたんですか。

今野 前は、調整費というのは国土庁計画調整局で持っていたんです。

C氏 むしろ大蔵の予算段階での調整が……。

今野 石油ショック後の財政難のときに調整費をつぶされたわけです。だから昭和53年くらいですかね。それで、どうしてもダメだということで復活してきましたけれども、まだ微々たるものです。昔から見ると機能していませんね。調整費だけでなく公共事業の計画決定への調整権もありました。

A氏 何か調整費が機密費と同じみたいに考えられちゃって。

それから吉田達男さんがおっしゃったのは、日本の場合は国土計画のときに常に防災というか、災害に対することを考えなければいけないと。この辺は四全総、五全総、三全総から含めて、どんなふうな形で今野先生は考えておられましたか。

**今野** あまり考えていません。考えていないというのは、防災の対象になる災害というのは極めて局所的に出るわけです。だから、防災対策というのはいまだに国の政策として安定していないでしょう。

この間の予算委員会で国土交通大臣が野党の質問に対して、日本は災害が多い国だから公共事業費を諸外国と単純に比較されても困る、かかることは事実だ、こう言ったわけです。そこを防衛するのに精いっぱい政策しかないわけです。だから、これをどう位置づけるかというのは大事なんですけども、計画の中にプロジェクト論的に書くとする、防災論というのは全国計画として書きづらくて、地方計画の中で取上げるべきだと思いますね。

**C氏** 首都移転問題はそれから出てきたのではないですか。

**今野** そうなんですけれども、首都機能の配置決定政策は全国計画ですがプロジェクトとしては地方計画の中で書かざるを得ないと思うのです。例えば新潟県魚沼・頸城地方というのは日本有数の地滑り地帯です。これは新潟県の一部ですからね、それを全国計画の中でというのもなかなか書けない話ですよ。いままでの政府の防災対策は、地滑り防止法とか、特殊土壌地域の対策法とか、豪雪地帯対策法とか、やはり局所的な特別地域計画の中に入れていたわけです。

**A氏** 第一次全総から含めて、防災は国土計画の中では別ものかどうかということですか。

**今野** 別ものとは考えていません。国土総合開発法の第2条にちゃんと防

災と出ていて柱になっていますから。ただ、具体的にプロジェクトとしては書きづらいところですね。防災政策として予防の政策をきっちり決めることが必要です。

だけど、防災の問題はまだいいんですよ。基本的コンセンサスは、例えば国が国土に関する白書を書くにしても計画を立てるにしても、国民は誰もそごを感じない。だけど、一番の問題は防衛ですよ。本来、国土計画なんていうのは防衛問題抜きに書けないんです。それなのにそれに触れられないのですからね。

A氏 それは触れられていませんよね。

今野 そうそう。いままで触れていないで、全国総合開発計画を立てるときに下準備の中で、閣議に出す予備的審査の段階で霞が関の各省幹事会というのがあるんです。当時、20省庁あったでしょう。20省庁の中に防衛庁と法務省だけが入っていない。そのくらいスポイルされていたんです。これでいいのかと。

その結果が何になって出たかというのと、この前の道路公団の議論のときに、国会で石原大臣は何を言ったか。北海道の高速道路を釧路・根室まで延ばすという計画があるわけです。そしたら、それは防衛のためにも必要なのではないかと言ったんです。自民党だったかどこだったかの議員が、早急に軍隊を送ったり何かするためにも必要なのではないかという質問をしたら、そんなの相手が攻めてくるとき一番先にやられていますから、そのときは軍隊を送れませんよ、だから要らないんですと（笑）。

A氏 国土計画の中に防衛を入れてしまうと、沖縄の基地をどうするかとか、日本の国の全体の防衛をどうするかという話になっていきますよね。

今野 ちょっと視点が違うと思うんですよ。沖縄の普天間基地をどうするかというのももちろん知識としてはあって、いまの戦略空軍の基地を地球上に配置して、不安定なこの地域を睨むためには沖縄以外には考えられないという、

地政学的なマクロ論的な話は国土計画の中に入って当然だと思いますけれども、それが沿岸の埋立論か、沖合の島型埋立かというのは国土計画で論じる必要は全くないんですね。ただ、マクロな視点の防衛と国土計画的な問題というのはやらなくて大丈夫なのか、というような問題はいっぱいあります。

例えば、中国はいま原子力潜水艦をつくって猛烈に海軍力を増強しています。その一端が、この間、宮古島で領海侵犯しましたね。いままで中国というのは、我々は琉球弧と呼びますけれども、種子島から台湾に至る、あそこの線を越えて太平洋へ出たことはなかったわけです。それが最近、やたらとあそこを破って太平洋に出てきて、グアム島の米軍基地なんて、常時、目視観測されていると言われているくらいです。

その軍事力の発展は中国の経済力の発展と絡んでいます。かつて、琉球弧から中国海軍が出られなかったときというのは、中国の対米貿易は全部神戸に集まって、神戸で積みかえて持って行っていたのです。したがって、中国が防衛する海域というのは東シナ海で終わっていた。それで十分だったわけです。

したがって、中国の海軍というのはどういう組織になっているか、例えば一般国民は知っていますか。何艦隊があるかわからないでしょう。マスコミも何も全く報道しないけれども、北海と東海と南海と3つの艦隊を持っているんですね。北海というのは黄海・渤海湾、東海が東シナ海、南海が南シナ海を持っている。3つの海軍基地があって、そのうち日本に一番近いのは東海の艦隊で、これの本拠地は浙江省の舟山列島にあるんです。それが常に日本の防衛線を破って出てきているんです。しかも経済発展したでしょう。コンテナ輸出が一遍に増えて、神戸へ持ってこなくなってしまう。そのコンテナ船はどこを走っているかというと、釜山の沖を通過して、日本海通って、津軽海峡に抜けているんです。

C氏 ああ、そうですか。

今野 そうですよ。釜山があれだけの大港湾になった。上海が世界一の大港

湾になっている。全部、津軽海峡を通過しているんです。中国、朝鮮半島のコンテナは全部津軽海峡。だとしたら、日本は横須賀に基地を置いているのではなくて、大湊に置かなければダメ。ということは十分議論しなくてはならないことでしょう。通航船舶の安全確保という観点だけでも新事態対応は常におこななければならないと思います。

C氏　ほんとですね。

今野　そういう議論を政府なり国会でやっているかというのと、誰もやっていないのです。だから日本の安全保障なんて、その辺の子供が殺されたから子供の通学を送り迎えする、そんな話で終わっている国家なんですよ。もっと怖いことがいっぱいある。

C氏　だけど防衛白書や何かには、津軽海峡のそういう通過数がしょっちゅう載りますよね。

今野　載っています。あれの報告で一番怖いのは、潜水したまま行っている船が何隻かある。

それで、日本は防衛の一助として人工衛星に取りかかったでしょう。あの背景は東シナ海と黄海というのは水深が200メートルしかない。浅いんです。そうすると、原子力潜水艦が潜水しているのが全部人工衛星でつかまるんです。ところが、琉球弧を破って太平洋へ来たり、日本海に出ると、海が深いから捕まらないんです。そこで破ってこっちに来るようになったから、少なくともあの浅い海をどういう潜水艦が動いているか、的確につかまなくてはならないというので人工衛星を打ち上げる必要が出てきたわけです。

A氏　そういうふうにお伺いすると、本来、防衛とか防災というのは国土計画の中では本当言うと中心ですよ。

今野 中心です。諸外国の事例からしても。

B氏 戦争前、防空計画というのが土地利用に大きな影響を持ちましたよね。それはまさに防衛の話だったわけですね。

今野 戦前の国土計画論というのは、最初の方に少し話しましたが、あれだって全部防衛からです。ドイツの国土計画というのも全部防衛論からですよ。だから東ドイツがあったときに、連邦政府は、東ドイツと州を接しているところには重要な企業立地を許さなかったのです。そのかわり地域経済の支援金を交付金でやっていました。いまはなくなりましたけどね。

C氏 一時期、二百海里の議論というのが随分賑やかでしたね。それはまたどうなったんですか。

今野 それがまた大変なんです。日本政府は何にもやっていないんです。

C氏 先ほどの防衛計画の……。

今野 まだ批准していないものまであるでしょう。

C氏 これは国土の話ですからね。そこら辺の詰めはどうなっているのか。

今野 そのとおり。何もやっていないから、答えられない。

A氏 石原知事はそれを随分言っていますね。何のために日本があそこに島を持つのか。竹島問題もありますし。

今野 世界でただ一つ置いてきぼりを食った先進国ですよ、あの二百海里論

というのは。どんどんどんどん進んでしまっている。

C氏 何が障害になったのですか。

今野 政府の無反応でしょうね。票にならない国土は国会が真剣になってと  
り上げない。自分の選挙区でないから。もっと責任を言えば、海をどうするか  
という世界的な動きがあるのに、海をどうするかなんて考えている国民も国会  
議員も一人もいないですよ。で、永田町に響いてこないのは票にならないから、  
政治家は取り上げないですね。海というのは。

A氏 確かに海は人が住んでいませんからね。

今野 6日の月曜日に、関係者だけ集まって大シンポジウムがあったんです。  
けしからん、政策が全くないというので、「海洋フォーラム」をやったんです。  
私も傍聴に行っただけですけども、それを支援してくれているのは日本財団だ  
け（笑）。

A氏 次の全総のうたい文句として、「二層の広域圏」という話でいくと、  
まさにあれは地理と土木の世界になったという印象があるんですね。そういう  
点でいくと、どういうふうに社会資本整備をするかというのと、生活圏という  
一つの地理の世界なので、こうなってくるとかなり変わってきているのです  
か。それはまた別にお話しいただきますがね。では、今日の会議は一応ここで。

（了）